

言語文化部会 令和元年度の研究報告

言語文化部会 部長：揖斐川町立坂内中学校 清水 裕樹

1 今年度の研究の方向

中国研 研究主題

生きてはたらく言語能力の育成
～言語能力の高まりを実感する言語活動の充実を通して～

《言語文化部会として目指す生徒の姿》

- ・ 社会生活において必要な国語の特質について理解し、それを適切に使う生徒
- ・ 国語の知識や技能を社会生活において様々な場面で主体的に活用する生徒
- ・ 古典の世界と、身近な生活とのつながりを感じ、古典に親しむ生徒

《言語文化部会 研究主題》

言語に親しみ、社会生活につなげる能力の育成
～「言葉への自覚」を高める指導の工夫～

《研究仮説》

- ・ 語句の量を増やし、話や文章の中で使うことを通して、言葉のもつ価値を認識し言語感覚を豊かにする言語活動を系統的に設定すれば、言葉への自覚を高めることができる。
- ・ 古典における小学校での学習内容との系統性を踏まえて教材分析を行い、社会生活とのつながりを意識させる言語活動を設定すれば、古典に親しむ生徒を育成することができる。

《研究内容》

- ① 「言葉への自覚」を高める指導計画の工夫
 - (1) 語句の量を増し、語句についての理解を深めるための指導計画の工夫
- ② 「言葉への自覚」を高める指導援助の工夫
 - (1) 言葉そのものを学ぶ指導・援助の工夫（辞書の活用・語彙の定着）
 - (2) 3領域との関連の中で、語句の量を増したり、語句の理解を深めたりする指導の工夫
- ③ 評価の工夫
 - (1) 生徒自身が「言葉への自覚」の高まりを実感することができる場の位置付け

令和3年度の飛騨大会に向けて、上記の研究主題で実践を進めること、これで2年。今年度の夏には、飛騨地区の先生方との研究会を開催することができた。その会では研究の方向を確認し、当日の授業者を決定することができた。そのような流れを受け、県の研究部員と、飛騨地区の研究部員の先生方と同じ歩調で進み始めることができた一年であったといえる。

来年度の後半には、令和3年度実施の教科書もまみえることができる。現行の教科書との違いも確認しながら、どんな教材でどのような力を生徒に付けていきたいのかを考えていく一年にしていきたい。

2 今年度の実践報告

【高山市立東山中学校 紺谷 篤 教諭】

○単元名 「状況の中で」第3学年

○教材名 「故郷」

《研究内容① 指導計画の工夫》

第一次では、生徒の実態を踏まえ、作品の時代背景や作者の生い立ちについて、基本的な知識を獲得させ、学習の見通しをもち、課題を明確にする時間とした。作品に出会う前に、難解な語句表現も含めて作品の価値に触れたことで、その難解さを疑問として素直に記す生徒が多く生まれた。生徒のこのような意識が、作品を読み深めていく上で出会う難解な語句や表現に立ち止まる必然性につながった。

第二次では、場面ごとに変化していく主人公の心情を捉えるための重要な描写について整理し直した。情景描写の独特な比喻表現や、「神秘の宝庫」などに見られるルントウに対する憧れの思いを表す比喻表現、ヤンおばさんに対する外見描写、喜びから恭しい態度に変わったルントウの描写の変化などの表現などだ。立ち止まらせた表現を教師が再整理したことで、指導の重点が明らかになった。

第三次では、生徒たちがこれまでに学習した内容を総合的に捉え、作者の意図や作品の主題について考えたことをまとめる活動を取り入れた。社会の変化を期待した作者の意図をふまえて、この作品のよさや価値などについて、自分の意見をまとめさせた。「作者の意図をふまえる」という点で、魯迅が意図的に用いた表現（第二次で扱った比喻表現や外見描写など）に再度立ち止まり、作品のよさや価値などについて、自分の意見をまとめる姿が見られた。

《研究内容② 指導援助の工夫》

第五時では、過去と現在のヤンおばさんの容姿や性格の違いや、「私」の戸惑いや諦めの心情描写に着目する授業を仕組んだ。それらの描写から、ルントウを回想した明るい心情から、美しかった故郷に住む人までも変わってしまったことに落胆する私の心情に気づかせ、ヤンおばさんが変わってしまった故郷の象徴であることを捉えられることをねらいとした。このねらい達成のために、「過去との比較」という視点として「私から見たヤンおばさんとは、どのような人物なのだろうか。」という課題を設定した。

生徒たちは「頬骨の出た」「唇の薄い」「コンパスそっくり」などの独特な外見描写に着目した。更に展開の中盤では、別の表現や語彙にも着目させるために、「ヤンおばさんの性格が最もよく表れている言葉はどれだろう。」という深めに発問を講じた。すると、生徒からは「冷笑」・「蔑む」・「嘲る」・「ふくれっつら」といった意見が出た。ここで更に、「なぜそう思ったのか」という発問をしたことで、各々で選択した言葉の意味を根拠とする必要性が生まれ、自主的に国語辞典を開き、それらの語句の意味を詳しく知ろうとする姿が見られた。また、近くの仲間と用法を確認する姿もあった。

ここで調べたことが展開後半の「ヤンおばさんの登場意図」を考える活動にもつながった。語句の意味を機械的に調べるのではなく、生徒自身が言葉に立ち止まり、疑問に思った語句の意味を自分の力で調べ、それを内容理解につなげていく姿を生み出した。

《研究内容③ 評価の工夫》

本実践までの振り返りの内容を分析すると、考えの根拠が不明瞭であったり、どのような思考から自分の考えを生み出したのかが分かりにくかったりする記述が多く見られた。そういった生徒の実態から、生徒自身の思考の軌跡と、その際に着目した表現や文章を明確にさせることで、言葉への自覚が高まるのではないかと考えた。

そこで本単元では、「どんな表現から何がわかって、何ができたか。」「誰のどのような意見によって、自分の考えが深まったか。(変わったか)」という観点で振り返りをさせた。単元の中では、振り返りを生徒同士で見合い、それに対してコメントをするという活動も取り入れた。第五時における評価規準は、「過去と現在のヤンおばさんの容姿や性格の違いや、私の戸惑いやあきらめの心情描写をもとに、ルントウを回想した明るい心情から、美しかった故郷に住む人までも変わってしまったことに落胆する私の心情に気づき、ヤンおばさんが変わってしまった故郷の象徴であることをとらえている」こととした。単元を通して振り返りの書き方を統一したことで、どの生徒も、「昔は豆腐屋小町と表現されていたヤンおばさんが、コンパスそっくりという表現に変化していたことから、痩せ細ってしまうくらい生活が苦しいことが分かりました。」のように、自分が着目した表現をはっきりと明記して振り返ることができるようになった。生徒自身が、自分の思考の根拠となった言葉・表現を明確にし、それを自覚して振り返る姿を生み出すことができた。

【飛騨市立古川中学校 狩野 愛乃 教諭】

○単元名 「つながりの中で」

○教材名 「星の花が降るころに」

《研究内容① 指導計画の工夫》

本単元の出口として、「物語の続きを書く」言語活動を設定した。そのために、単元の中で、「場面をつなぐ言葉」「伏線となるキーワード」「関係性が分かる言葉」「時間や場所等の場面設定が分かる言葉」に着目するように単位時間を仕組み、言葉を根拠に物語の続きが書いていけるように順序立てて指導した。

《研究内容② 指導援助の工夫》

第二場面では、第一場面の回想シーンでの夏実と主人公の関係性の比較を基に、言葉に着目しながら心情を読み取っていった。「今日こそ」の「こそ」に強い決意を読ませることで、その後の「～のに。～のに。」の繰り返しで大きなショックを受けている主人公の心情を捉えることができた。

《研究内容③ 評価の工夫》

毎時間のまとめとして、「自分が読み取ったこと」「仲間の意見」「意見の変容」の三つの視点を設定した。特に、「意見の変容」について根拠を明確にしてまとめを積み上げることで、次時の読み取りにおいて「どこからそう思ったのか」という視点で、一人読みできる姿につながった。

【各務原市立那加中学校 足立 美穂 教諭】

○単元名 「いにしえの心に触れる」

○教材名 「蓬萊の玉の枝—『竹取物語』から」

《研究内容① 指導計画の工夫》

かぐや姫を巡る男たち（五人の貴公子・帝）に焦点を当て、単元を構想した。原文と現代語訳をつなげて理解するために、それぞれの人物がどんな行動をとっているのかを、挿絵等にも着目させながら、読み取った。

《研究内容② 指導援助の工夫》

最後の場面では、かぐや姫が帝に置いていった手紙（和歌）と、帝がかぐや姫に宛てた手紙（和歌）を対応させることで、富士の山で燃やすことを命じた帝の心情に迫っていった。「燃やす」という言葉を「捨てる」「埋める」などの言葉と比較させることで、「燃やす」ことで、和歌に詠まれた愛する気持ちを届け続けたいという帝の心情に迫ることができた。

《研究内容③ 評価の工夫》

授業のまとめとして、本時の課題を解決するためのキーワードを含んだまとめを書くように指導した。最後の場面においては、「燃やす」という言葉を用いて、「煙」と関わらせて天にいるかぐや姫に思いを届けたいという思いを書いていることを評価規準とした。また、他の場面においては「かぐや姫と桃太郎の共通点」や「五人の貴公子を自分の尺度でランキング付け」を行うことで、授業での学びを深め、根拠となる原文の言葉への自覚を高めた。

3 今年度の成果と課題

〈成果〉

- 事前にどの言葉に着目して授業を構想するかを明確にしたことで、教師自身も感覚的な指導ではなく、どの生徒にも「この言葉だけでは自覚的に使わせたい」という意図が明らかになり、構造的に読解する力を付ける一助となった。
- 実際に、着目した言葉をまとめに用いて書くことを積み重ねたことで、文脈に即した正しい意味で、その言葉の意味を捉える姿につながった。

〈課題〉

- 授業で付けた力や自覚できた言葉を、次時以降の授業において使えるようにはなってきた。さらに、「社会生活」と広げたときにどのように生きてくるのか、教師がさらに見通しをもちながら、指導に当たっていききたい。

4 来年度の方向

| 日にち | 会合名等 | 内 容 | 部会としての見通し |
|-------|--|--|---|
| 5月中旬 | ・第1回 研究部総会 ◆第1回「言語文化部会」 | ○今年度の研究の見通し ○役割分担 | ・研究の方向を具現化するために、 <u>どんな実践を積み重ねたいか</u> を考える。 ・飛騨大会の授業は、どの教材、領域がいかの見当をつける ・実践提案者、司会者等の当たりをつける(実践発表者=ぎふこくご執筆?) |
| 8月中旬 | 「明日の授業を考える会」 in 飛騨地区 | ○授業相談 | ・授業者、略案作成。 |
| | 夏季統一研修会 中学校国語科研究協議会 ◆第2回「言語文化部会」 | ○2021年度飛騨地区 県大会に向けて →研究の方向の確認・役割分担(授業者・実践発表者の決定) | ・飛騨地区大会で、 <u>どんな授業を公開するのか</u> <u>授業者の意志の確認</u> 。→指導案検討 ・プレ授業者決定。 ・言語活動一覧表作成者の決定。 ・実践発表者、司会者決定。 ・実践は個人か複数化? |
| 2学期中 | ◆第3回「言語文化部会」 プレ授業 研究会 | ○略案を基に、授業実践 | ・研究の方向性との兼ね合い。 ・言語活動一覧表の有用性について。 |
| 12月下旬 | 「明日の授業を考える会」 | ○授業相談 | |
| 2月中旬 | ・第2回 研究部総会 ◆第4回「言語文化部会」 | ○本年度の成果と課題をまとめ、2020年度の方向を決定 ○「中国研HPを活用した情報共有」の 練り合わせ ○実践発表を通して、本年度の歩みを県 下に発表 | ・実践の成果と課題を交流する。(飛騨地区大会 に向けての授業の方向性の決定) ・飛騨地区大会に向けて、部会としての実践発 表内容について検討する。(プレゼンの方向 性+誰が作るか?) |

※日程や場所については、変更になる可能性があります。

5 令和3年度 飛騨大会に向けての作成物

- ①言語文化部会研究構想【清水】
- ②指導案(前文・単元指導計画・展開案)【紺谷先生】
- ③言語活動一覧表【 】
- ④実践発表資料【 】
- ⑤研究の方向・実践発表プレゼン【 】
- ⑥ぎふこくご原稿【 】
- ⑦言語文化部会 実践資料集のまとめ【 】

6 令和3年度 飛騨大会当日の役割分担

- ①司会者【 】
- ②実践発表者【 】
- ③記録者【 】
- ④写真撮影【 】
- ⑤会場統括責任【 】
- ⑥言語文化部会研究構想発表【清水】